生活時間調査から探る降雪地域の小学生の降雪前後の時期の相違における生活行動の特徴

小　野　恭　子※

要旨：

家庭科教育では自立した生活者の育成を目指し、子ども自身が自分の生活実態をふまえてそこから課題を見つけ、解決方法を考え実行することを重視している。しかし小学生自身が自分の生活を客観的に把握することは容易ではない。さらに授業を構築する教師自身も子どもたちの生活を十分に理解しているとは言い難い。自分の生活をとらえる一つの方法として生活時間調査があり、家庭科の学習でも用いることを学習指導要領でも示している。そこで、生活時間調査を用いて、降雪地域の小学生の生活実態の特徴を探ることとした。生活は地域の環境や家族の生活に影響を受けることが考えられることから、降雪前と降雪後の２回、小学校５・６年生を対象に生活時間調査を実施し、降雪の影響を探った。特に降雪は農家の生活に影響が大きいと考え、農村地域と市街地域の学校に分け比較した。

降雪による影響は戸外活動の時間が少なくなり室内での活動や趣味・娯楽の時間が増えることや買い物時間が減ることなどに現れていた。

農村地域の児童には降雪時期にかかわりなく労働時間があるが、市街地域の学校の児童には労働時間がない。農村地域の学校の児童は、降雪前の農繁期に家の農作業を手伝う児童が一定数おり、降雪後の農閑期も手伝っていることが明らかとなった。一方で平日では、降雪前後の生活行動に大きな違いが見られず、家の仕事よりも学校のほうが、児童の生活行動に大きな影響を与えていることもわかった。

これらの実態を踏まえて、児童も教師も様々な生活の課題、特に生活時間の学習において課題を見つけ解決をはかる力を身に付け、よりよい生活を創造していくことが必要であることが明らかとなった。

キーワード：小学生、生活時間調査、降雪地域

Features of Elementary School Student Daily Lives Behaviors in Different Seasons in Snowing Regions as Shown in Time-use survey

Kyoko ONO

Abstract:

Home economics education focuses on cultivating the capacity to live independently, through having children identify their own issues based on their own actual lives, think of solutions, and carry them out. However, it is not easy for elementary school students themselves to achieve an

※　おのきょうこ　　弘前大学大学院地域社会研究科地域政策研究講座
kyokoono@hirosaki-u.ac.jp

objective grasp of their own lifestyles. Nor, as well, can the teachers constructing the classes be said to have a full understanding of the children's lifestyles. Time-use surveys are one method of grasping individual lifestyles, and are indicated for use in home economics study in the Courses of Study as well. Here, time-use surveys were adopted to explore the characteristics of the actual lives of elementary school students in snowy areas. Based on the expected influences on lifestyles due to regional environments and family life, time use surveys were conducted for fifth and sixth graders twice, once before and once after snowfall, to explore the influence of the snow. As farming households were thought to be especially influenced by snow, schools in rural villages and residential areas were separated for comparison.

The effects of snowfall were found to reduce time spent outdoors and to increase time spent on indoor activities, hobbies, and leisure, as well as reducing shopping time.

While time spent working was unaffected by the snowfall period for children in rural villages, those at schools in residential areas spent no comparable time working. A fixed number of children at schools in rural villages helped their families with farm work during the farming season before the snow, and were found to help during the off season after the snow as well. Elsewhere, no major lifestyle behavior differences were found on weekdays, indicating that school had a greater influence on children's lifestyle behavior than household-related work.

These results show that both children and teachers need to acquire the ability to identify and solve various lifestyle problems, in particular those relating to lifestyle time for study, and to create better lives.

Keywords: Elementary school student,　Time–use survey,　Snowfall area

Ⅰ．研究の背景および目的

従来から家庭科教育では児童自身が課題を見つけ、解決策を考えさせ、考えた解決策を実行する自立した生活者の育成を目指している。望月ら[1)]は、家庭科は暮らしと命を守るために地域を家庭生活の基盤ととらえ、家庭生活との関連から地域の課題を把握して授業ができる教科であると定義している。各地域にはそれぞれの気候風土や地域文化の中で様々な特徴のある産業が発達し、その相違が家族や子どもたちの生活に影響を与えている。特に青森県弘前市のように、冬は降雪によって閑繁が明確な農村地帯では、降雪が暮らしに与える影響も大きい。生活の課題は地域の特徴によって異なり、かつその解決方法や実践も、その地域の生活実態も踏まえて考え実践していかないと、解決に結びつかない。そこで、家庭科の目標である「よりよい生活を創造する」ために、降雪や産業が児童の生活行動に与える影響や生活課題を明らかにし、児童も教師も、地域の特徴を踏まえた実践可能な解決方法を考えるために、青森県弘前市の降雪や農村地域により生活行動の相違を明らかにしようと、本研究に取り組んだ。

生活時間調査は、１日24時間の生活行動のすべてを記録し、その行動の種類によって分類し、それぞれに配分する時間量やその行為をしている人の割合などで、生活行動を把握する調査方法である。サーライはユネスコの研究活動の一環として、はじめて８か国の国際比較調査を実施し、地域の産業や文化、性別、労働、生活の仕方などによって生活時間が異なることを明らかにした（大竹[2)]）。経済活動の統計だけでは見えないが社会にとって有用な活動を把握する方法として、1995年に国連統計局は、各国に生活時間調査の実施を推奨し、生活時間分類を提示した。日本でも篭山、藤本らが生活時間研究の基礎を築き（大竹[3)]）職業、気候、文化などによって異なる生活行動を分析してきた

が、家政学では家庭内の性的役割分業意識や、年齢による生活行動の違いに焦点を当て研究されてきた。さらに特別活動や道徳などでも、自分の活動を振り返るツールとして、生活時間がもちいられてきている。

日本でも1936年からNHKが生活時間調査として、1976年から総理府統計局が社会生活基本調査として、5年に1度、10月に全国的な生活時間調査に取り組み、結果を公表している。総務省統計局は、時間のみならずスポーツや余暇活動、インターネットなどの行動の参加率も調査している。社会生活基本調査の生活時間は都道府県、男女別、10才区切り、職業の有無等などのクロス集計結果を公表している。しかしこの調査では、15才以上が対象となっており、小学生の生活行動は対象としていない。NHKの生活時間調査は10歳以上を対象とし、小学生・中学生・高校生別、職の有無別などの属性で生活時間量ならびに、時間帯ごとの行為者率が集計されている。ただし都道府県などの地域ごとの集計は行っていない。また定期的に行われているものではないが、ベネッセ教育研究所がこれまでに2回、小学生を対象とした生活時間調査を実施した。ただしこの調査は全国平均結果のみ公表され、地域別による集計は公表されていない。

そこで、本研究調査では、降雪地帯の青森県弘前市に住む小学生を対象とし、かつ、降雪前と降雪後の2つの時期に、降雪の有無による生活行動の相違を明らかにすることを特徴としている。

これまでも小学校家庭科では生活時間を教材とした学習は行われている。この学習では、自分自身の生活時間を1時間ごとに見直し、家族に協力する時間を見いだすことを目的に実施されることが多い。それは、平成29年度に告示された小学校家庭科の学習指導要領[4)]で、生活時間の学習は『A家族・家庭生活（2）家庭生活と仕事ア家庭の仕事と生活時間』に設定されていることが挙げられる。内容は『(2) 家庭と仕事ア家庭には、家庭生活を支える仕事があり、互いに協力し分担する必要があることや生活時間の有効な使い方について理解すること』とされており、解説ではさらに『生活時間の有効な使い方については、生活時間が生活の中で行われている様々な活動に使われている時間であり、個人が自由に使う時間、食事や団らんなど家族とともに過ごす時間、家庭の仕事など家族と協力する時間などがあることを理解できるようにする。（中略）家族の生活時間を考えながら、自分の生活時間の使い方を工夫することによって家庭生活が円滑に営まれることに気づくことができるようにする』と明記されているからである。

しかし子どもの生活行動は短時間で行われることも多く1時間ごとでは捉えきることは難しく、家族の生活行動も十分に把握しているとは言えない。さらに家庭科の授業では、生活課題を見つけ、解決させる為にも子どもたちの生活実態に即した展開が求められる。しかし学習指導要領は全国統一であり、それぞれの地域における気候や文化、生活習慣などは配慮されていない為、それぞれの地域において実態に応じた配慮をすべきである。よって生活時間調査を行い、地域のおける子どもの生活実態を明らかにする必要がある。また季節によって生活環境が異なる降雪地域においては、降雪による生活への影響も明らかにする必要があると言える。

小野[5)6)]は都市部の小学校で生活時間データを教材として用いた授業実践を行い、ジェンダーや年齢による生活の相違に気づく授業ができることを明らかにしている。さらに小野[7)8)]はへき地農村漁村部において小学生の生活時間データを分析し、小学生の生活には地域の商業施設や学習施設の種類や有無によって生活行動が異なること、また、教師と児童の生活時間への影響について、異なる見方をしていることを明らかにした。つまり、教師は生活時間データから子どもの生活実態・課題の原因として施設の有無をあげたが、子ども達は、地域の人々との関連性をも含めて考えており、教師と小学生では捉え方に違いがあった。

これらの小学生を対象とした生活時間調査に関する先行研究から、家庭における子どもたちの活動は地域の環境や家族の生活からの影響も大きい。降雪地域では降雪により小学生が自分で行動出来る範囲が狭まると考えられること、運動する場所が室内となり限られるため運動時間が減ることによる運動不足や肥満傾向になりやすいなどの影響があると考えられる。すなわち、地域の環境として、公

共交通機関や公民館や図書館などの公共施設、習い事のできる場などの物的環境のみならず、降雪の有無などの気候的環境も影響を受ける。特に農村地域では、降雪は、家族の仕事の取り組みの相違などに大きく影響し、こうした家族の生活の相違が、子どもの生活にも影響を及ぼすと考えられる。

よって本研究では、降雪地域において小学生が降雪の有無などの影響をどの程度受けているかを明らかにし、降雪地域における小学生の生活実態を把握することを目的とした。

Ⅱ．調査方法および行動分類

調査対象の抽出は降雪地域である青森県弘前市の小学校５・６年生を対象とし、調査の目的を説明し、調査依頼を行った中で、調査に協力しても良いと回答した小学校を対象とした。さらに調査を行うにあたっては、調査結果について統計的に処理し個人が特定できないようにする旨を説明する文章を保護者配布し協力していただける児童を対象に調査を行った。

調査対象は、農村地域と市街地域に分離し,両地域の比較を通して、児童の生活実態の相違を明らかにしようとした。２つの地域とは、保護者の仕事として果樹栽培農家が多いと回答した学校の児童を農村地域、会社員が多いと回答した学校の児童を市街地域に分類した。調査は2017年10月～11月（降雪前で農繁期）と、2018年１月～２月（降雪後で農閑期）２回実施した。調査対象児童数は表１の通りである。

表１　調査対象児童数及び学校規模

単位：人

地域及び学校数	降雪前	降雪後
農村地域３校	61	58
市街地域５校	343	317
合計	405	375

農村地域の学校は３校、市街地の学校は５校を対象とし調査を実施した。降雪前より降雪後の方が回答者は少なくなっているが、これはインフルエンザなどの影響を受け、児童が欠席していたためである。

調査方法は、１日を10分ごとに区切った２日分を記録できる調査用紙を郵送にて配布し、学校を通じて調査用紙を配布･調査を実施してもらい、その後郵送にて回収を行った。調査対象日は２回とも、学校のある平日と学校のない休日の２日間で実施した。さらに調査用紙への記入は、一日の行動を思い出しながら記入する日記方式で実施し、分析は、調査者が記述された行動を後から分類するアフターコード形式で行った。なお比較に用いるNHK調査は、調査者が記入する段階ですでに分類行動を示し、回答者が自分の行動を分類して記述するプレコード方式をとっている。プリコードの３つの大分類は､「仕事、学業、家事、社会参加など社会や家庭を維持向上させるための行動に使う義務性･拘束性の高い時間を拘束時間」､「人間性を維持向上させるための自由裁量性の高い行動（会話･交際、レジャー活動、マスメディア接触、休息）を楽しむ時間を自由時間」､「個体を維持向上させるための必要不可欠性の高い行動（睡眠、食事、身の回りの用事、療養・静養）に要す時間を必需時間」としている。

なお、分析で使用する生活時間とは、生活行動分類ごとに費やしている時間量を時間（分）で表し、行為者率とはその生活行動を行なっている人の割合を表したものである。

Ⅲ．NHK生活時間調査との比較から見る小学生の生活実態

先に述べたように小学生のデータが利用できるのは、NHKの生活時間調査（以下NHK調査と呼ぶ）であることから、NHK調査と本調査を比較し、本調査の対象者の特徴を明らかにすることとした。

NHK調査の３大分類の生活時間と本調査を平日、休日別に比較したものが比較したものが図１、図２である。NHK調査は降雪地帯の対象者は少ないことから、比較には本調査の降雪前のデータを用い、平日、休日別に比較を行った。

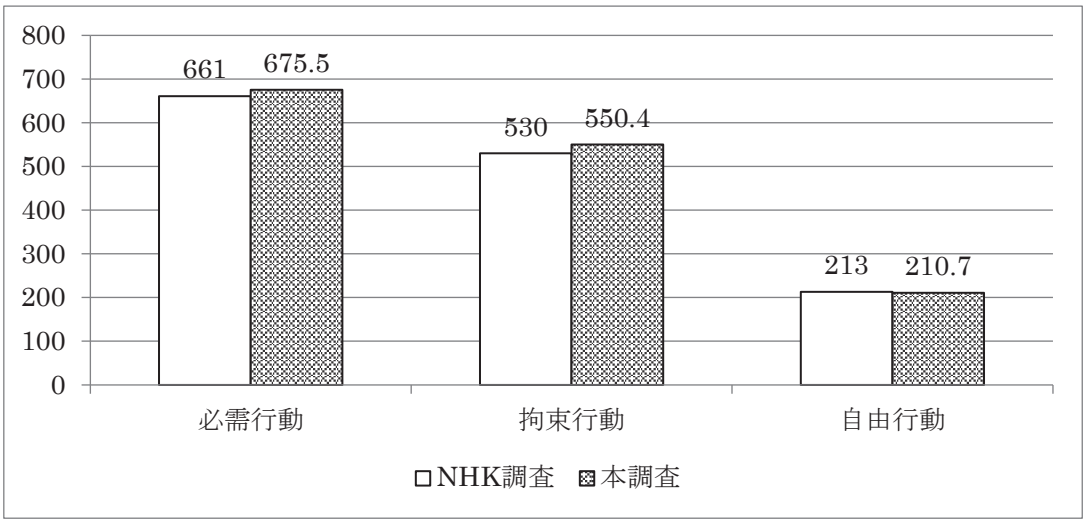

図１　平日におけるNHK調査と本調査（降雪前）の比較

単位：分

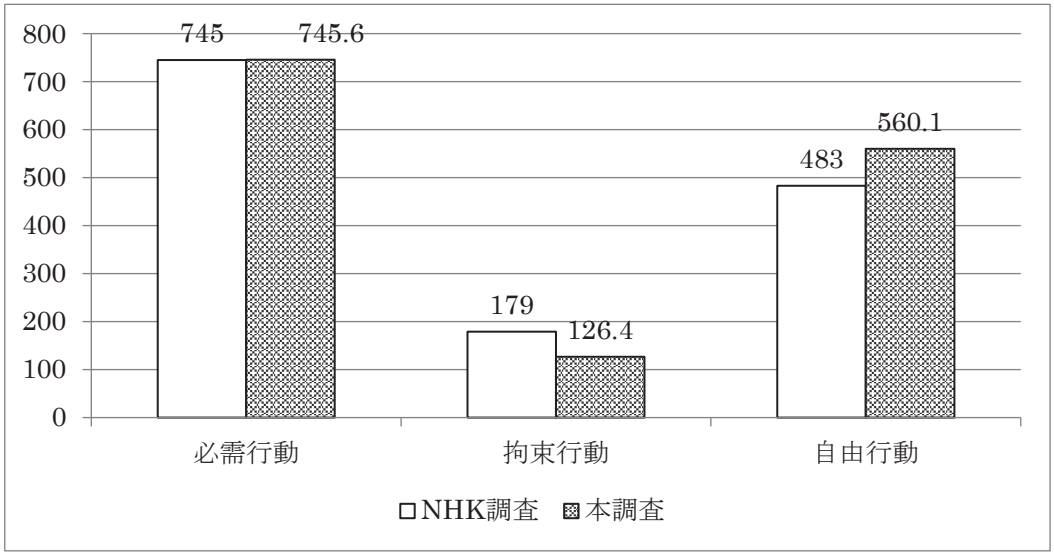

図２　休日におけるNHK調査と本調査（降雪前）の比較

単位：分

図１の通り、平日では本調査の方が必需行動で14.5分、拘束時間で20.4分長く、自由時間は2.3分少なく、休日は本調査の方が必需時間で0.6分、自由時間で77.1分長く、拘束行動では52.6分短くなっていた。必需時間は平日休日ともにNHK調査と本調査で大きな差がなかったが、休日の拘束時間と自由時間のNHK調査と本調査の差は、休日では平日の２～３倍となっていた。

このことより、睡眠や身の回りの支度などの必需時間はNHK調査と本調査に大きな差がないもの

の、拘束時間は平日、休日ともに違いがあり、その差は休日の方が大きくなっている。

しかし、NHK調査の拘束時間には仕事、学業、家事などが含まれている。小学生は仕事で差があるのか、学業で差があるのか、家事で差があるのかは、その生活の相違に大きく影響することから、どの項目においてどのような差があるのかについては明らかにすることが重要である。そこで、その分類が可能な本調査によって、これらが明らかになるような行動分類を作成することで子どもたちの生活実態の特徴が捕らえることとした。

Ⅳ．本調査における行動分類

本調査における子どもたちの行動の特徴を詳しく捉えるために、大竹[9]が1985年、1990年に行った生活時間調査の分類（収入労働時間、生理的生活時間、家事的生活時間、社会的文化的生活時間）を参考に本調査の行動分類を作成した。しかし大竹の生活時間調査では、調査対象が大人である為、学習時間が社会的文化的生活時間に含まれている。本調査は小学生を対象としており、小学生は、平日は特に学校での活動時間が長く、一日の大部分を占めていることや、学習することが生活の一部となっている為、学習時間を取り出して分類する方が、その特徴を捉える上で重要であると考えた。そこで、小学生を対象とした今回の生活時間調査では収入労働時間、家事的生活時間、生理的生活時間、学習時間、余暇活動時間の５大分類とすることとした。それぞれの分類に当てはまる主な行動と分類は表２の通りである。

表２　行動分類と主な行動

大分類	小分類	主な行動
収入労働合計		勤務、産業、家での仕事、通勤、家業の手伝い
家事的生活	家事・育児	食生活関係、衣生活関係、住及び設備関係の家事、家政管理その他、家事に関する移動、教育・世話・介護に関する移動
	買い物	買い物、サービス購入、買い物待ち時間、買い物の移動
家事的生活合計		家事・育児と買い物の合計時間
生理的生活	睡眠・休憩	睡眠・昼寝・休息・考え事
	食事	食事・間食、外食、給食
	身支度	入浴、身支度、医療、上記以外の生理的行動、生理的行動の移動
生理的生活合計		睡眠・休憩と食事、身支度の合計時間
学習	学校での学習	学校での学習、休み時間、クラブ・委員会活動、掃除
	学校以外での学習	家庭での学習、学習塾などでの学習
	学習のための移動	学校、学習塾などでの学習
学習合計		学校での学習、学校外での学習、移動の合計
余暇活動	趣味・娯楽	観戦、鑑賞、観戦鑑賞に関する移動、室内の趣味・娯楽、戸外の趣味・娯楽、習い事、家庭での習い事の練習時間
	戸外活動	運動、スポーツの習い事、ピクニックなどの戸外活動、戸外活動に関する移動
	室内の活動	テレビ、ラジオ、読書、新聞・雑誌、動画、パソコン
	交際・組織活動	子ども会など組織活動、交際、家族との会話、交際に関する移動
余暇活動合計		趣味・娯楽、戸外の活動、室内の活動、交際組織活動の合計

さらに詳細な分析のために、この５大分類を、収入労働、家事・育児、買い物、睡眠・休憩、食事、身支度、学校での学習、学校以外での学習、学習のための移動、趣味･娯楽、戸外活動、室内の活動、交際・組織活動の13の小分類に分類した。

Ⅳ．降雪の有無による子どもの生活

1．降雪前後における平日、休日の生活時間及び行為者率による生活行動の比較

ここでは農村地域と市街地域の区別をせずに、調査対象者全体について、生活時間（分）および行動率（%）の平日と休日の比較を行った。表３には降雪前の、表４には降雪後の、平日休日の生活時間および行為者率（農村地域と市街地域の合計）を示した。

降雪前における平日と休日の5大分類で、平日より休日に生活時間が減っている項目は学習であり、それ以外の項目はすべて休日に増えていた。このことから、平日行っている学校での学習が休日にはなくなるため、それ以外の行動に時間を費やしていることがわかる。行為者率で比較すると、特に家事的生活において平日18.3%から休日47.5%に増えており、その時間は6.9分から50.1分と７倍になっている。よって時間的に余裕がある休日には家事を行う子どもが増え、時間も長くなっていることがわかる。休日に生活時間が減っている学習時間を小分類で詳細に比較して見ると、学校以外での学習は行為者率では平日90.7%であったが、休日は72.4%と減っているが、生活時間では平日58.4分であるが休日は72.4分と休日が長くなっている。すなわち、行為者率から休日に学校以外での学習を行っている子どもの割合は減っているが、多くの児童が学習に取り組んでいること、その結果学校以外での学習時間も長くなっており、平日よりも長い時間、学校以外の学習に取り組んでいることが明らかとなった。なお、休日の学習のための移動時間が1.2分、行為者率４%であることより、移動している者の割合は低くその時間も短いことから、塾などの外部の学習場所に行くよりも家庭での学習が多く行われているといえる。

表３　降雪前における平日休日の生活時間および行為者率（農村地域と市街地域の合計）

大分類	曜日	平日		休日	
	小分類	生活時間（分）	行為者率（%）	生活時間（分）	行為者率（%）
収入労働	収入労働時間合計	0.4	0.2%	2.7	2.2%
家事的生活	家事・育児	5.4	15.1%	17.3	30.6%
	買い物	1.4	3.7%	32.8	29.1%
家事的生活合計		6.9	18.3%	50.1	47.5%
生理的生活	睡眠・休憩	515.7	100%	581.1	100%
	食事	98.1	100%	105.5	99.8%
	身支度	61.7	99.5%	59.0	94.5%
生理的生活合計		675.5	100%	745.6	100%
学習	学校での学習	445.7	98.8%	0.0	0.5%
	学校以外での学習	58.4	90.7%	72.4	72.4%
	学習のための移動	39.0	97.6%	1.2	4.0%
学習合計		543.1	99.3%	73.6	72.9%
余暇活動	趣味・娯楽	73.8	74.4%	239.3	88.8%
	戸外活動	65.9	43.2%	164.0	55.5%
	室内の活動	66.6	77.1%	146.5	81.6%
	交際・組織活動	4.4	9.5%	10.3	12.7%
余暇活動合計		210.7	98.8%	560.1	99.8%
その他		2.0		4.0	
不明		1.5		3.9	
合計時間		1440.0		1440/0	

（注）少数第２位を四捨五入しているため合計が1440分、100%に満たない場合がある。

降雪後における平日と休日の比較において、大分類で休日より平日の方が長く行っていた行動は学習時間のみであり、そのほかの収入労働時間、家事的生活時間、生理的生活時間、余暇活動時間は休日の方が長くなっていた。この結果は降雪前と同様の傾向であった。また小分類においても降雪前と

同じ傾向が見られた。降雪後の特徴として、家事的生活時間行動が降雪前よりも平日と休日で生活時間、行為者率ともに減っており、特に休日の家事的生活の行為者率は約８％少なくなっていた。一方、余暇活動の室内の活動では行為者率は降雪前より減っていたが、降雪後の生活時間は長くなっていた。降雪後は屋外で過ごすことよりも室内で過ごすことが多くなり、買い物や屋外での活動といった外に出て行くまたは外で活動する行動が減ることがわかった。

表４　降雪後における平日休日の生活行動および行為者率（農村地域と市街地域の合計）

大分類／小分類	曜日	平日		休日	
	生活時間（分）および行為者率（％）	生活時間（分）	行為者率（％）	生活時間（分）	行為者率（％）
収入労働	収入労働時間合計	0.0	0.0%	0.5	0.3%
家事的生活	家事・育児	4.0	12.5%	16.9	25.7%
	買い物	1.8	3.5%	21.3	21.4%
家事的生活合計		5.8	15.4%	38.2	40.6%
生理的生活	睡眠・休憩	518.9	100%	583.9	100%
	食事	104.8	100%	107.1	99.7%
	身支度	59.6	98.7%	54.3	92.5%
生理的生活合計		683.3	100%	745.3	100%
学習	学校での学習	440.5	100%	0	0%
	学校以外での学習	65.1	92.3%	71.9	75.9%
	学習のための移動	39.9	95.5%	0.5	0.5%
学習合計		545.4	100%	73.6	76.2%
余暇活動	趣味・娯楽	73.9	71.8%	240.2	87.4%
	戸外活動	57.8	35.9%	153.4	54.5%
	室内の活動	68.3	74.2%	170.0	79.7%
	交際・組織活動	3.3	5.3%	8.7	9.4%
余暇活動合計		203.3	98.9%	572.3	100%
その他		0.3		4.0	
不明		1.8		3.9	
合計時間		1440.0		1440.0	

（注）少数第２位を四捨五入しているため合計が1440分、100％に満たない場合がある。

降雪前と後の生活時間行為者率を比較し、季節による影響を考察する。降雪前には平日にも行われていた収入労働が、降雪後は平日には行われていなかった。さらに家事的生活時間も降雪後に少なくなっている。降雪前の調査時期は、この地域の産業の一つである果樹農家は作業が最盛期となる農繁期と重なっているために、子どもたちもこれらの家業の手伝いをする場合が多くなっていた。また降雪前の方が家事的生活時間も長くなっており、家業の手伝いをしなくても、農作業で忙しい家族のために家庭における家事を手伝っている様子が伺えた。しかし平日の生活は学校生活が１日の大部分を占めるため、降雪前後において大きな違いは見られなかった。

Ⅴ．家族の職業の違いによる子どもの生活

降雪の有無による子どもたちの生活時間調査比較により、収入労働時間においてNHKの生活時間調査とは異なる特徴が見られた。これはこの地域の産業の一つである果樹栽培の農繁期と農閑期の影響を受けていると考えられる。しかし、調査では児童それぞれの個別の具体的な家族の職業を尋ねることはできず、調査依頼の時に学校から保護者の職業について傾向を回答してもらい、その結果をもとに農村地域と市街地域とに分類して比較した。今回の調査では,果樹農家が多い学校は農村地域、

会社員が多い学校は市街地地域として分類集計し、比較を行った。

1．農村地域の学校における降雪前後および曜日別における生活行動

農村地域の学校における曜日別降雪前後の生活時間及び行為者率をまとめたものが表５および表６である。

平日の大分類について降雪前後で比較したところ、降雪前より降雪後に生活時間が長くなっていたのは、学習時間（差1.4分）、余暇活動時間（差3.6分）の２項目で、逆に減っていた大分類は収入労働時間（差2.4分）、家事的生活時間（差0.3分）、生理的生活時間（差2.5分）となっていた。10分以上の差があるものはなかった。余暇活動の小分類において降雪前と降雪後を比較すると趣味・娯楽の時間は63.0分から83.4分へ増えているが、行為者率は0.1％しか増えていない。戸外活動の時間は52.9分から50.5分へと2.4分しか減っていないが行為者率は56.5％から34.5％と減っていた。さらに室内の活動時間は93.5分から86.5分へと減り、行為者率も93.5％から82.8％へと減っていた。戸外の活動時間における降雪前後の行為者率が56.5％から34.5％と４割ほど減っているにも関わらず、生活時間が７分減と１割以下の減少であることや、スポーツを行う場所への移動時間が積雪の影響により降雪後は多くの時間がかかっており、スポーツへの参加率の減少ほどには費やす時間が減少しにくいことが考えられる。移動時間の増加の影響は、降雪前は学校の校庭や体育館など近い場所でも行えるが、降雪後は活動できる場所が限られるために遠い場所まで行くこともあると考えられる。さらに室内の活動が減り趣味・娯楽の時間が増えていることより、テレビや読書などの活動よりもゲームなどの時間が増えていると推測される。

表５　農村地域の学校における平日の降雪前後における比較

大分類／小分類	季節	降雪前		降雪後	
	生活時間（分）および行為者率（％）	生活時間（分）	行為者率（％）	生活時間（分）	行為者率（％）
収入労働時間	収入労働時間合計	2.4	1.6%	0.0	0%
家事的生活時間	家事・育児	7.7	17.7%	7.4	15.5%
	買い物	1.1	1.6%	1.2	1.7%
家事的生活時間合計		8.9	19.4%	8.6	17.2%
生理的生活時間	睡眠・休憩	515.6	100%	516.8	100%
	食事	93.1	100%	96.0	100%
	身支度	60.1	98.4%	53.4	94.8%
生理的生活時間合計		668.8	100%	666.3	100%
学習時間	学校での学習	453.3	100%	442.4	100%
	学校以外での学習	45.6	83.9%	56.2	89.7%
	学習のための移動	38.0	98.4%	40.3	98.3%
学習時間合計		537.1	100%	539.0	100%
余暇活動時間	趣味・娯楽	63.0	75.8%	83.4	75.9%
	戸外活動	52.9	56.5%	50.5	34.5%
	室内の活動	93.5	93.5%	86.5	82.8%
	交際・組織活動	9.8	9.7%	2.4	5.2%
余暇活動時間合計		219.2	100%	222.8	100%
その他		0.8		0.3	
不明		2.8		3.0	
合計時間		1440.0		1440.0	

（注）少数第２位を四捨五入しているため合計が1440分、100％に満たない場合がある。

次に休日における農村地域の学校の降雪前後の大分類を比較した。降雪前より降雪後の方が増えている行動は余暇活動時間のみで88.9分増えていた。減っていた行動は収入労働時間で14.4分、家事的

生活時間で15.3分、生理的生活時間で42.3分、学習時間で13.8分減っていた。全ての大分類で10分以上の差があり、最も差が大きかった項目は余暇活動時間であった。学習時間では、学習のための移動時間が降雪前は0.7分と少ないながらも多少あったが、降雪後は0分と誰も移動していないことがわかる。休日であることを考慮すると学習のための移動時間は、学校に行くための時間ではなく、塾などの外部の学習施設に行くための時間であると考えられるが、その時間は0分と誰も移動していないことから、学校以外の学習時間は全て家庭での学習時間であることがわかる。また一番差が大きかった余暇活動の小分類では、全ての小分類で生活時間が増えていたが、行為者率では趣味・娯楽の時間および室内の活動時間において減っていた。このことから、趣味・娯楽および室内の活動時間では、趣味を行った人に限れば生活時間が増えていることが明らかとなった。また農村地域の学校では収入労働時間が降雪前後ともに12.0分、3.5分と表われており、降雪前後ともに、子どもでも家業を常時手伝っている様子が見られた。

表６　農村地域の学校における休日の降雪前後における比較

大分類／小分類	季節	降雪前		降雪後	
	生活時間（分）および行為者率（%）	生活時間（分）	行為者率（%）	生活時間（分）	行為者率（%）
収入労働	収入労働時間合計	17.9	13.1%	3.5	1.8%
家事的生活	家事・育児	27.9	34.4%	26.8	38.6%
	買い物	36.6	27.9%	22.3	22.8%
家事的生活合計		64.4	49.2%	49.1	54.4%
生理的生活	睡眠・休憩	568.7	100%	555.1	100%
	食事	106.1	100%	91.1	98.2%
	身支度	62.5	96.7%	48.9	86.0%
生理的生活合計		737.3	100%	695.0	100%
学習	学校での学習	0.0	0%	0.0	0%
	学校以外での学習	66.5	75.4%	53.3	70.2%
	学習のための移動	0.7	3.3%	0.0	0%
学習合計		67.1	77.0%	53.3	70.2%
余暇活動	趣味・娯楽	224.4	96.7%	242.6	91.2%
	戸外活動	132.5	47.5%	139.7	54.4%
	室内の活動	176.5	88.5%	234.9	74.2%
	交際・組織活動	5.5	9.8%	10.6	12.3%
余暇活動合計		539.0	100%	627.9	100%
その他		8.0		0.3	
不明		6.3		10.9	
合計時間		1440.0		1440.0	

（注）少数第２位を四捨五入しているため合計が1440分、100%に満たない場合がある。

以上の結果より、農村地域の学校の子どもの生活特徴として３点あげられる。１点目は降雪前には平日・休日ともに、降雪後には休日に収入労働時間がある点である。これは、降雪前の農繁期には平日休日ともに子どもも家業を手伝うことがあること、さらに農閑期は休日にのみ家業を手伝っていることから、一部の子ども達は一年を通して家業を手伝う機会があることを示している。２点目は、家事的生活時間は、平日休日ともに降雪前後で大きな生活時間の違いがないこと、特に買い物時間が平日、休日ともに少ないことが特徴の一であった。このことから日常的に家事を手伝う子どもが一定数おり、その行動は家事・育児に関することであった。買い物時間が少ないことについては、農村地域の学校がある地域はそれぞれ商業施設までの距離が遠く、子どもが一緒に買い物に行くことが少ないからと考えられる。３点目は休日の学習の為の移動時間が降雪後には０分であることである。農村地域の学校では外部での学習施設に行く子どもは少なく、家庭で学習することが学校以外での学習の中

心であることが示された。

2．市街地の学校における降雪前後および曜日別における生活行動

市街地の学校における平日の降雪前後の生活時間を表７により比較したところ、収入労働時間は降雪前後ともに０分であり、行動を行っていないことがわかった。また降雪前よりも降雪後に生活時間が増えた大分類は生理的生活時間のみで、家事的生活時間、学習時間、余暇活動時間ではそれぞれ0.7分、0.3分、7.7分少なくなっていた。しかしその差は少なく、平日は降雪前後で大きな違いがないことが示された。行為者率を比較すると家事的生活の家事・育児において降雪前より降雪後に7.9％増えていた。しかし生活時間は1.1分少なくなっていることから、家事・育児を行っている子どもは増えているもののその時間は短くなっていた。

表７　市街地の学校における平日の降雪前後における比較

大分類／小分類	季節	降雪前		降雪後	
	生活時間（分）および行為者率（％）	生活時間（分）	行為者率（％）	生活時間（分）	行為者率（％）
収入労働	収入労働時間合計	0.0	0%	0.0	0%
家事的生活	家事・育児	5.0	14.3%	3.9	22.2%
	買い物	1.5	3.5%	1.9	3.8%
家事的生活合計		6.5	7.5%	5.8	15.4%
生理的生活	睡眠・休憩	515.3	100%	519.5	100%
	食事	98.9	100%	106.3	100%
	身支度	62.0	99.7%	60.5	99.4%
生理的生活合計		676.2	100%	686.3	100%
学習	学校での学習	445.5	100%	438.8	99.7%
	学校以外での学習	60.7	92.7%	66.8	92.8%
	学習のための移動	39.3	98.8%	39.6	94.7%
学習合計		545.5	100%	545.2	100%
余暇活動	趣味・娯楽	74.3	74.3%	72.4	71.2%
	戸外活動	68.2	40.8%	59.0	36.1%
	室内の活動	62.3	74.1%	65.9	62.7%
	交際・組織活動	3.5	9.3%	3.4	5.3%
余暇活動合計		208.3	98.5%	200.7	98.7%
その他		2.2		0.3	
不明		1.2		1.6	
合計		1440.0		1440.0	

（注）少数第２位を四捨五入しているため合計が1440分、100％に満たない場合がある。

次に、休日の市街地の学校における降雪前後の生活時間行動の結果を表８に示した。この表から、収入労働時間は降雪前後とも平均で０分となっており、全く行っていないことが分かった。しかし降雪前には行為者率として0.6％いることから、家業の手伝いを行っている子どもが少数いるが、その時間が短いために生活時間の平均は限りなく０に近くなったと考える。また降雪前より降雪後の方が長くなっていた大分類の行動は、生理的生活時間と学習時間であり、それぞれ7.2分、1.2分増えていた。降雪前より降雪後の方が短くなっていた行動は家事的生活時間と余暇活動時間で、それぞれ11.8分、1.5分短くなっていた。

表８　市街地の学校における休日の降雪前後における比較

大分類／小分類	季節	降雪前		降雪後	
	生活時間（分）および行為者率（%）	生活時間（分）	行為者率（%）	生活時間（分）	行為者率（%）
収入労働	収入労働時間合計	0.0	0.6%	0.0	0%
家事的生活	家事・育児	15.4	17.9%	14.6	23.1%
	買い物	32.0	21.4%	21.2	21.2%
家事的生活合計		47.4	32.4%	35.6	38.0%
生理的生活	睡眠・休憩	583.6	100%	589.1	100%
	食事	105.4	99.4%	110.0	100%
	身支度	58.4	91.9%	55.4	94%
生理的生活合計		747.4	100%	754.6	100%
学習	学校での学習	0.0	0%	0.0	0%
	学校以外での学習	73.2	72.3%	75.1	76.9%
	学習のための移動	1.3	3.5%	0.6	0.6%
学習合計		74.5	72.3%	75.7	77.2%
余暇活動	趣味・娯楽	243.0	86.7%	240.0	86.7%
	戸外活動	169.2	61.8%	156.3	54.7%
	室内の活動	140.7	76.3%	157.8	78.8%
	交際・組織活動	11.1	12.1%	8.3	8.9%
余暇活動合計		564.0	99.4%	562.5	100%
その他		3.2		9.4	
不明		3.4		2.0	
合計		1440.0		1440.0	

（注）少数第２位を四捨五入しているため合計が1440分、100%に満たない場合がある。

10分以上の差があった家事的生活時間では、降雪前より降雪後に行為者率が5.6%増えていたにもかかわらず、生活時間は7.2分少なくなっていた。小分類を比較すると家事・育児において5.2%行為者率が増えていたが、生活時間は0.8分短くなっていた。買い物においては0.2%行為者率が下がり、生活時間は10.8分短くなっていた。これらの結果から、降雪により家にいる時間が長くなると家事・育児に係わる機会が増え、短時間の手伝いを行うようになっていることが明らかとなった。さらに余暇活動においては、趣味・娯楽の時間に大きな違いは見られないが、戸外活動では生活時間、行為者率がともに減り、室内の活動が生活時間、行為者率ともに増えていた。よって、降雪後には、戸外での活動は減り室内での活動が増える。しかし個々の記述内容を見ると、それはゲームなどの室内の趣味・娯楽に時間を費やしていのではなく、テレビやビデオ、動画などを見るなどの行動に時間を費やしていることがわかった。

以上、市街地域における平日と休日の降雪前後の生活行動において、平日休日ともに同じ傾向が見られたのは、収入労働時間が０分であること、降雪後に生活時間が増える行動が、生理的生活時間、学習時間であり、降雪後に生活時間が減る行動は家事的生活時間、余暇活動時間であることがわかった。

３．農村地域の学校と市街地の学校の比較より考察する家族の職業による影響

降雪前後における農村地域の学校と市街地の学校の生活時間調査結果において共通点は、２点挙げられる。１点目は平日の行動は降雪や家族の職業による影響が少ないことである。これは平日には学校で費やす時間は、給食と登下校の時間を除いても一日に７時間程度あり、給食や登下校の時間を含めると８時間以上を占めていること、学校があることによって毎日行う行動が学校中心で一律であることが影響していると言える。２点目は降雪後に家事的生活の生活時間は短くなるが、行為者率は上

がっていることである。これは降雪により家庭でいる時間が長くなり、短時間の家事を行う機会が増えるからであると考えられる。

休日において子どもたちの生活は、自由度を増し、変化があることから、降雪前後の休日において、大分類の５つとその他を足した６つの項目で農村地域と市街地域の児童の生活時間を図３、図４に示した。

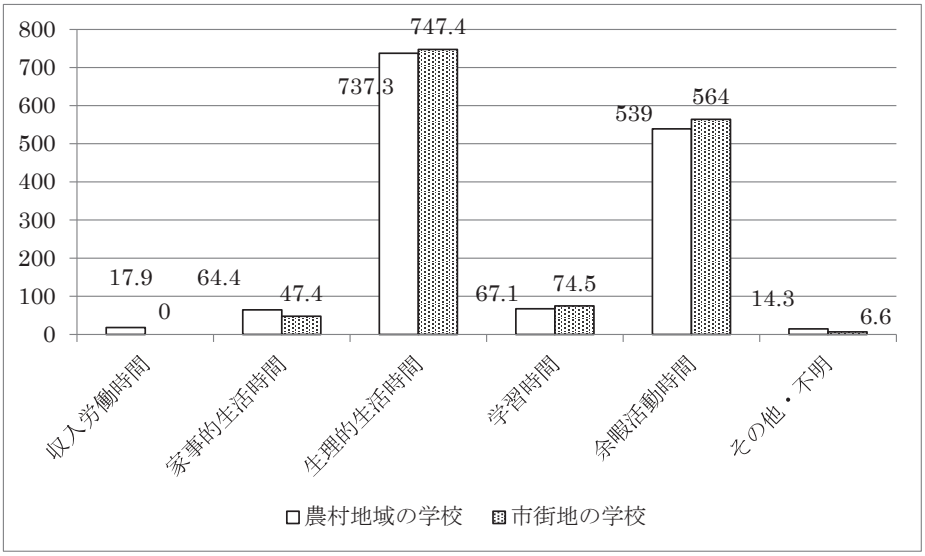

図３　降雪前の休日 農村地域と市街地域の５分類及びその他の生活時間

単位：分

降雪前の比較では、農村地域の児童は、収入労働時間が17.9分あるにも関わらず市街地域の学校では０分であった。農村地域の学校では家事的生活時間が市街地域より長く、生理的生活時間と学習時間、余暇活動時間は市街地域の児童の方が長くなっていた。ただし市街地域の児童でも、降雪前の収入労働の行為者率が0.6％あるため、少数ではあり、かつ平均時間にすると０分であるが、家業の手伝いをしている子どももいることがわかる。

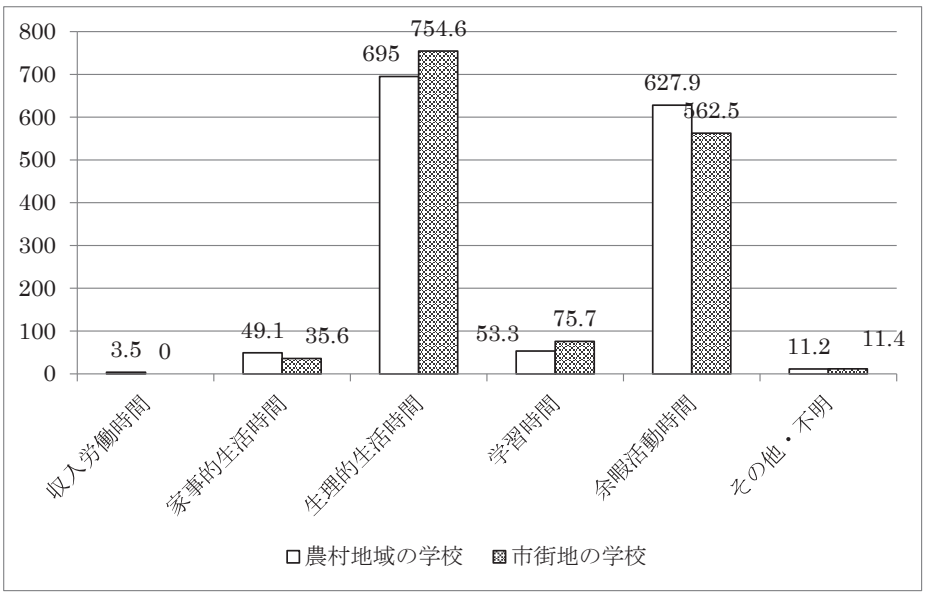

図４　降雪後の休日　農村地域と市街地域の５分類及びその他の生活時間

単位：分

降雪後の農村地域の児童では、収入労働時間が3.5分あるが、市街地域の児童は0分であった。さらに家事的生活時間と余暇活動時間は農村地域の児童の方が市街地域の児童より長くなっており、生理的生活時間と学習時間では逆に市街地域の学児童の費やす時間が長くなっていた。

また、農村地域の児童で収入労働時間に一定の時間が使われていて、果樹農家では降雪前が果樹を収穫する農繁期にあたり、子どもでもできる作業の手伝っている場合や、家族全員が作業をしているために子どもたちもその場所に一緒に行って時間を過ごし、手伝いを意識しないが必然的に児童でもできることに係わることになるからと推測される。

Ⅵ. 考察

降雪地域の子どもたちの生活では、農村地域でも市街地域でも、平日は降雪前と降雪後の2つに時期で大きな違いがないことがわかった。これは1日の大半を学校で過ごし、家庭でも学習が中心となっていることが影響していることが明らかとなった。しかし1日の大半を当てていた学校に行く時間が無くなり自由に使える時間が増える休日には、降雪前と後の2つの時期では、いくつかに相違が見られた。例えば、余暇活動における屋外での活動は少なくなり、室内での活動時間が増えることが明らかとなった。さらに家事的生活では家事・育児の行為者率は増えているものの生活時間は減っており、買い物行動では行為者率はあまり変わらないものの生活時間は減っていた。このことは、降雪後には買い物に行ってもその時間は短時間となっており、さらに農繁期で無い降雪後は家事・育児の行動も短時間になっていることが明らかになった。

降雪後に余暇活動などに相違が出るのは、降雪により運動できる場所が室内に限られる為、戸外での活動が制限されるからである。この地域の降雪後における戸外活動はスキーが考えられるが、リフト代などを考えると経費もかかる為、頻繁に行くことは難しい。よって降雪により屋外での活動は減り、室内での活動が増やして運動不足を補っていると考えられる。さらに子ども達だけで移動できる距離は限られ、戸外での活動は制限される為、室内にいることが多くなる。室内にいるために、家事を手伝う機会が増えるが、農繁期の降雪前よりはその時間は短くなる。降雪後は、家族も室内にいることが多くなり、家事にかける時間が増えるが、子どもとともに家事を行うことや、子どもの自立の為にお手伝いをさせているからであると考えられる。

降雪前の農繁期は、家の仕事である家業を手伝うために収入労働時間が長くなっていると考えられる。

家族の職業における影響は、収入労働時間において表れた。降雪前と降雪後の2つの時期ともに、休日に収入労働時間があり、降雪前である農繁期ではその時間が長くなり、農繁期では平日にも収入労働時間の行動を行っている子どももいた。平均値では、休日に収入労働時間は17.9分であるが、これは行為者率13.1％で、この割合の子どもが行なっている時間である。個別のデータをみると、最も長い者で570分おこなっており、その他、340分、260分、240分行なっている子どもがそれぞれ1名ずついた。その行為をしている者は1割強でしか無く、かつしている児童は4時間を超え、10時間にせまる者もおり、しかし平均は約18分と短いことから、農村地域では、家業である農業の1人前の担い手となっている家庭とほとんど手伝いをしない家庭があることがわかった。また、多くは降雪後の農閑期は家業を手伝っていないことが多いが、中には休日に収入労働時間があり仕事を常に手伝っている子どももいることも明らかとなった。

昔は、家族全員が収入労働に携わることが多く、また家の手伝いをしながら学習することが多く、労働を行うことで収入を得ることを子どものことから学んでいた。しかし現在の子ども達は農村地域であっても収入労働に携わることがほとんどなく、学校での生活や家庭での学習などの時間が平日は大半を占めている。平日においても学校での学習が余暇活動に変わっているだけで、ゲームやテレ

ビ、動画などを見て過ごしている実態がある。しかし、今回の調査から農村地域においては、少数ではあるが家業の手伝いを行なっている事例が見られ、労働を行うことで収入を得ることについて学んでいる児童もいることがわかった。しかし市街地域の学校では労働を行なってはおらず、さらに家事の手伝いもほとんどしていない。このことから、子どもは収入に結びつく労働について経験する機会がほとんど無いことも明らかとなった。労働をすることで収入を得ることは生活を行う上で大切なことである為、自立した生活者を育成する家庭科では大変重要なことであると考える。

今後の課題として、降雪による影響が少ないと考えられる地域において、時期の異なる生活時間調査を行い、今回得られた結果が降雪による影響であるのかどうかについてさらに検証する必要がある。

引用文献

1） 望月一枝　佐々木信子　長沼誠子 「秋田発未来型学力を育む家庭科」 開隆堂出版、pp209、2011
2） 大竹美登利「大都市雇用労働者夫妻の生活時間に見る男女平等」 近代文芸社　pp162、1997
3） 大竹美登利「大都市雇用労働者夫妻の生活時間に見る男女平等」 近代文芸社　pp46、1997
4）「小学校学習指導要領解説　家庭編」東洋館出版社、pp121、2018
5） 小野恭子「生活時間調査記録を扱った児童の気づき」 東京学芸大学附属学校研究紀要、第36号、pp65–73、2009
6） 小野恭子　中山節子　伊藤葉子　西原直江 「生活時間を教材としたESDの授業実践」 弘前大学教育学部紀要、116(1)、pp81–88、2016
7） 小野恭子　鎌田浩子「地域の環境が小学生にあたえる影響―北海道道東地区の生活時間調査より―」 へき地教育研究、第68号、pp41–48、2014
8） 小野恭子「へき地農村地域の学校における生活課題の把握―教師と子どもの調査より―」 東北家庭科教育研究、第14号、pp8–16、2015
9） 大竹美登利「大都市雇用労働者夫妻の生活時間に見る男女平等」 近代文芸社、pp94–95、1997

付記

本研究の調査結果は文部科学省科学研究費補助金（課題番号：17K04733、研究代表者：小野恭子）による研究から得られたものである。